青森県立高等学校魅力づくり検討会議中南地区部会（第２回）概要

日時：令和５年１２月１２日（火）
１３：３０～１６：００
場所：弘前実業高等学校　会議室

＜出席者＞
中南地区部会委員
菊地　建一 地区部会長、吉田　健 地区部会副会長、池田　守臣 委員、
岩渕　智恵 委員、古川　浩樹 委員、奈良　拓昌 委員、藤田　明彦 委員

１　開会
外崎高等学校教育改革推進室長から挨拶があった。

２　事務局説明
地区部会における検討の進め方について
事務局から、資料２及び資料２の附属資料について説明した。

３　意見交換
地区部会における検討の進め方について学校・学科の充実の方向性（整理案）【たたき台】について
事務局から、押さえておくべき基本的な事項等として、これまでの会議資料について説明した。

＜これまでの会議資料＞
・7/7 検討会議（第２回）資料４「学校・学科・教育制度等の現状」
・8/7 第１分科会（第２回）資料４　附属資料①「各校のグランドデザイン」
資料４　附属資料②「各校の教育活動の状況」
・10/5 第１分科会（第４回）資料２「高等学校教育に関する意識調査（速報）」

Ⅰ　魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方
事務局から、資料３の全体構成と、「**１　検討に当たっての視点**」、「**２　求められる力と人財像**」及び「**３　県立高等学校教育の方向性**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全体）
○　全体を通して高等学校教育について記載されているが、小・中学校にも当てはまることであり、発達段階に応じてどのようにしていくのかという視点が抜けている。小・中学校の教育にも向けた意見という形で提示したほうがよいと思う。

○　高校教育改革をやるとなったときは、学校が主導して取組を進めていくのか。
→（事務局）高校教育改革は５年間ごとの実施計画や、１０年間の基本方針を定めており、その基本方針や実施計画に基づき学校で取り組むこともあるし、県教委から取組を示すこともある。

○　高校に関しては、どのような学校が求められているかという保護者の目線がかなり大きいと思う。
　親としては、子どもがどういった人財になっていくかが大事であり、青森への理解を深め、魅力を発信し、地域の発展に貢献できる人財が一番魅力的だと思っている。
　地域の特性を地域の人たちが理解し、地域の産業を子どもたちに伝えることが大事であり、学校と地域が連携しながら教育活動に取り組めるよう両者が良好な関係性を築くことが重要。

（検討に当たっての視点）
○　トピックという言葉があるが、通常日本語の置き換えであれば、話題やテーマという、それぐらいの意味合いか。
→（事務局）第１分科会で検討した際に、ＳＴＥＡＭ教育やＤＸなど、国において様々な動きがある中で、本県ならではのトピックを考えていかなければいけない、という趣旨の発言だったもの。
○　トピックの使い方について、一般的なものでないのであれば、注釈をつけるなどすべきだと感じた。

○　第１分科会では１０年後、２０年後でどのような能力が求められているのかという大きな案のようなものはあるのか。地区部会では何を指標に、どのような範囲や枠組みの中で考えていけばよいのか。１ページには「これからの時代に対応するために求められる資質・能力」が示されているが、１０年後や２０年後までを見据えたものなのか。
→（事務局）第１分科会において、全ての生徒に育成すべき力としては、知・徳・体の調和のとれた生きる力など不易な力のほか、自己肯定感、自分で考え行動できる力、コミュニケーション能力、新しいことを常に学ぶ意欲、態度などといった力が必要、という意見があった。

○　６つ目の○「前提として第１次産業の衰退による人口流出」の部分について、現在の人口流出の要因はもっと多様であり、人口流出そのものが単純に第１次産業の衰退ということを今の時代に定義していいのか疑問である。

（求められる力と人財像）
○　２の（１）のアの最初の○、前段の「生徒が身に付けるべき資質・能力」という部分について、アは「全ての生徒に育成すべき力」という項目なのに、また「生徒が身に付けるべき資質・能力」と同じことを繰り返しており、この部分は不要と考える。文章の構成をもう一度考えてほしい。

○　２ページの「（２）各高等学校の特色を生かした人財の育成」の２つ目の○「多様なイノベーションを創出する」という部分について、「志」以上にその「資質・能力」を身に付けることが必要。志だけではなくて、資質・能力を身に付けるという言葉があったほうが、よりリアルな力を生徒に持たせるという意味合いになると思う。

（県立高等学校教育の方向性）

○　高校授業のうちのおおむね８割は教科教育（数学・国語・英語等）なので、その充実が大事である。２ページに記載されていることはどちらかと言えば探究の時間やホームルーム等、学校独自でやる時間であるように思う。

教科教育の充実が第一にあり、プラスアルファとして特色化があると考えるため、その点についても記載したほうがよいと考える。

○　２ページの【生徒のニーズに合わせた充実した教育環境】の１つ目の○に、「本県の子どもたちが学びたい場所で学びたいことを学べる環境づくり」とあるが、教育委員会だけではなく県庁全体で経済支援や補助等を行える体制を整備する等、そういった環境づくりができればよいと思う。

（その他）

○　中学校で今求められているのは授業の改善。教科教育の充実という視点で、高校ではどのように取り組んでいるのか。

高校においても授業改善に取り組む動きがあれば、中学校としても授業改善に向けた取組を進めていきやすい。

○　ＩＣＴを活用した授業改善について、教員からの一方通行の授業ではなく、生徒の主体的・対話的な学びを大事にし、ＩＣＴを活用しながらグループ活動を行うなど、高校でも授業改善に取り組んできている。また、ＩＣＴを活用した様々な授業の方法が全国で実践・発信されてきているので、そういった事例も参考にしながら授業改善はされていると考える。アクティブラーニングの授業が普通に行われるという授業展開が、高校でもしっかり根づいていると感じている。

Ⅱ　これからの時代に求められる学科等の充実

事務局から、資料３「**１　全日制課程　（１）普通科等**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全体）

○　意識調査の「将来なりたい職業」について、将来を何も決めていない中学生の割合が高い。何も決めていない中で、普通科を志望するのが６０％を超えている。子どもたちは自分がやりたいことをまだつかみ切れていないので、将来の職業についてというよりも、こういうことを研究したいからこういう大学に行く、そのためには何を勉強すればよいか、といった視点でキャリア教育を充実させていく必要がある。

事務局から、資料３**「１　全日制課程　（２）職業教育を主とする専門学科」**と**「（３）総合学科」**について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全体）

○　職業系の学科について、その面白さを知らないのでどうやっても普通科志願者が多くなること自体は否定しないが、中学校では専門高校についての説明はどのようにされているのか。

○　高校教員による学校説明をしていただいている。本校の場合、私立は全校中学校に来るが、県立はパンフレットを配るぐらいで、それを中学校の教員が伝えることが多い。

○　農業、工業、商業や家庭科での学びの楽しさが中学生には伝わっていないようであり、それを知らないがゆえに定員割れしている学科があるようなので、もったいない。もっと産業教育や専門高校の魅力を発信していく努力が必要と考える。

○　中南地域の基幹産業は農業、工業、観光であり、中南地区の高校は、そのほとんどをカバーしている。

○　中学生が高校を訪問するのは３年生が多いと思うが、３年生になるともう意識が高校に向いているため、２年生のうちから高校との交流をやってもらえればと思う。

○　学校視察を通じて、中学校に高校の先生が来てもらうより、逆に中学校の先生が高校の現場を見たほうが魅力が伝わりやすいと感じた。

○　小学校の５年生、６年生ぐらいで探究活動の一環として高校訪問をしてはどうか。また、学校の先生より、生徒が説明するとより親和性があると思う。

（農業科）

○　農業高校ではドローンなどの最先端の技術を活用したスマート農業や、グローバルＧＡＰの認証取得に向けた取組など魅力ある取組を行っているが、ほとんどの中学生は高校に行ったことがないので､そういう魅力を知らないと思う。そういう高校の魅力を知る機会を、中学校３年生ではなく、中学校１・２年生や小学校高学年に与えることが必要。

○　小学校の段階から様々な体験学習を行う機会を与えることが重要。しかし、高校でそういう体験学習を行っていることが中学生以下の子どもたちに知られていないため、更なる周知が必要。

○　柏木農業高校を志望していても、通学の利便性を理由に二の足を踏む中学生もいるため、通学利便性についても検討が必要。

（職業教育を主とする専門学科全般）

○　１６ページに「教員が地元企業等でインターンシップを行うことができるような体制を検討してはどうか」とあるが、どのような資質向上を求めているのかわからないので、この背景を知りたい。

　また、文末が「どうか」と疑問文になっているので、修正した方がよい。

→（事務局）台北市の専門高校でこういったことをやっているという事例紹介のような形での意見だった。地元会社･地元企業でインターンシップというのを盛んにやられているようである。

事務局から、資料３「**２　定時制課程**」及び「**３　通信制課程**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（定時制課程）

○　中学校の教員は、特別支援学級における愛護（療育）手帳をもらえない生徒の進学に非常に危機感がある。定時制・通信制課程の倍率も上がってきているため、定時制・通信制課程の教職員数が足りず、スクールソーシャルワーカーも必要だと思う。できれば定時制課程の学校が増えればよい。１９ページの今後の方向性に、「通級による指導を、定時制課程ではなく全日制課程で行う動きが他県で多く見られる」とあるが、青森県でも実現できればよい。

　また、通学の利便性等を理由に二の足を踏んでいる家庭もあるため、対応を検討してほしい。

（通信制課程）

○　通信制課程は今後もますます需要が増えていく。通信制課程において、４月に入学する生徒はそこまで多くないが、年度中途の転入学や編入学により秋口半ばからは１クラス４０人を超え、講師が不足する科目も出てくる。今後、通信制課程の在り方を考えていかなければいけない。

（その他）

○　【学校・学科の設置】に「岩手県安比高原に開校したハロウ・スクールを参考としてはどうか」とあるが、魅力をつくるという意味での特色化を打ち出す参考ということと思うが、正式な日本の学校ではない（学校教育法第一条学校ではない）ところを参考にするのに違和感を覚えた。もともと日本の子弟を対象とはしておらず、高い授業料と寄宿料に拠っており、あのようなカリキュラムや、あのような人財の先生をどんどん呼べればいいが、どんなに良くても、それは県立高校ではできない。

Ⅲ　多様な教育制度

事務局から、資料３「**１　中高一貫教育**」、「**２　全日制普通科単位制**」及び「**３　総合選択制**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（中高一貫教育）

○　２２ページの「エ　拡充した場合の効果等」について、ここの項目だけ全寮制のことに触れられていて、青森高校、弘前高校、八戸高校といった、具体的な名称も出ており、この項目だけ異質なような気がする。他の項目とバランスがとれないのではないか。具体的な名称が出ているということは、それ以外は考えないということか。寮の在り方として様々問題点やよい点、悪い点があったと思う。

（全日制普通科単位制）

○　資料４の「学校・学科・教育制度等の現状」の５２ページの全日制普通科単位制の高校の教育課程の例を見る限り、他の全日制普通科の高校のカリキュラムと何も変わらないと感じた。他の一般的な普通科学年制と普通科単位制の違いを知っている高校の先生ならともかく、一般の方には分かりづらいのではないか。この５２ページの教育課程表から選択科目が多くあるから単位制だと説明しても、他の普通科と比較した教育課程表でもなければ違いが明確ではないのでは。単位制高校なら前期、後期で単位認定できるなど、非常に弾力的なシステムだということがもっと分かるよう資料が必要である。これらの特色が一般の方にどれだけ伝わっているのか。全日制普通科単位制の説明をもう少し充実させたほうがよいと考える。

○　「単位制」と「学年制」の違いなど高校の先生しか知らないような議論をしても不十分であり、県民からの意見を聞くと言いながら、説明が不足しているようなので、きちんと資料に盛り込んだほうがよい。

○　卒業に必要な７４単位を取ればそれでよいという制度を実際に採用してよいのかという議論をする必要がある。現在やっていないで終わるのではなく、そこも含めて議論する必要がある。

○　教育制度等の周知について今後検討する必要がある。

Ⅳ　各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等

事務局から、資料３「**１　特色化の推進**」、「**２　多様な主体との連携の推進**」及び「**３　小規模校における教育活動**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（ＩＣＴの活用による教育環境の充実）

○　本県の場合、端っこにある学校はもうこれ以上、生徒がいないからといってもなくせない。高知県は東西に長く、北海道は広く、長崎県は離島が多くそれぞれ教員配置に課題があるのに対して、ＩＣＴを活用している。全部の教科とは言わずとも、教員数が少ない教科・科目について、本県の総合学校教育センターのような機関から遠隔で授業を行っている。教育委員会で遠隔授業を単位認定できる制度を進めるならば、鰺ヶ沢高校や大間高校でも、ある程度生徒数がいないと開設が難しい科目の履修と単位修得が可能となる。生徒が少ないからといって学校をなくすのではなく、小規模だからこそ受け入れてもらえる、そこで頑張れる生徒もいる。ＩＣＴが進んでいる中、どんどんその利点を生かさなければならないと考える。

○　小・中学校である程度ＩＣＴを活用した授業を行っていないと、高校に進学したときに授業のスピードについていけるのかと心配になった。小・中学校のときからＩＣＴ活用能力を身に付けることが必要。

○　対面授業のほうが、時間をかけた遠隔授業よりもはるかによい授業ができる。遠隔教育に向けて様々調べて、試行錯誤しながらやって、ようやく普通ぐらいの授業にはなるが、それでよしとするか。教育の質の確保という観点では、遠隔授業は今の技術ではなかなか難しいところがあり、予備校のサテライトのようにただビデオだけ見ているような一方的なことはやれるが、双方向にした途端、生徒５人に対して教員が３人必要になるなど、なかなか現実的ではない。それなりの学力を保障することも難しい。ただ、教科によっては効果的な活用ができる場合もあるので、遠隔授業の更なる研究は必要。

青森県内の郡部の生徒数の減少は顕著であり、そういった地域の高校を維持できるかというとそうではない。ただ、そこに住む子どもたちがどこで勉強するか、どこであれば通えるか、下宿なのか等、そういう整備も併せて考えていくべきと感じた。

ＩＣＴについては、遠隔授業としての活用ではなく、学習支援など補助的な活用が望ましい。

○　通信機器やソフトもどんどん改良されていることから、学校をなくすのではなく、自宅から通えるところに学校が残っているようにしたい。遠隔授業は対面授業と比べ課題は多いが、それでも地域から学校がなくなるよりは遠隔授業の実施を検討すべき。

○　地域の活性化については、地域に学校があるかどうかが非常に大きいので、小・中学校も高校もなくなると大変な事態になり過疎化が進むため、統廃合は慎重に検討しなければならない。ＩＣＴの技術もどんどん進歩していくと思うので、遠隔授業の活用もその選択肢となりうる。

○　２８ページと３０ページにある「コミュニティ・スクール」の言葉の意図を確認したい。２８ページの「ウ　不登校生徒への多様な学びの提供」に、【特別支援学校との連携】とあるが、特別支援学校を含めたコミュニティ・スクールの設置、つまり新しい学校をつくることを検討すべきということか。

→（事務局）特別支援学校も一緒になってコミュニティ・スクールのような形になれば、特別な支援を要する生徒への対応という部分で取組が充実できるのではないかという趣旨の意見である。高校を中心として、例えば地域の企業や、自治体等連携の相手方の中に特別支援学校も入れて連携するようなイメージと捉えている。

○　現在行っているコミュニティ・スクールは学校単独であり、他校種との連携も含めて記載するかどうかは整理が必要。

○　中南地域はもともと弘前市自体が小中学校のコミュニティ・スクールを県内でも一番多く設置している地域であり、高校も他地区と比べて導入校が多い。学校の先生だけでできることは限定されているので、地域の方々や弘前大学の教授等の学識経験者や行政の関係者を入れれば、学校の先生方の視点と違ったものが入ってくる。

○　第１分科会でも、コミュニティ・スクールを検討案件として視野に入れると、より多面的に魅力化を検討できるのでは。

○　コミュニティ・スクールについて、高校はどちらかと言えば二の足を踏んでいるところが多いが、効果は大きい。
　それぞれの学校の魅力化を検討する際には、学校の先生方だけで考えるのではなく、地域の視点も重要であり、それを踏まえた上での魅力づくりが必要である。

（小規模校における教育活動）
○　中学校の特別支援学級には、大きな集団は苦しいと言う生徒もおり、そういった生徒にとって鰺ヶ沢高校が選択肢の一つになっている。中学生が高校生活に不安を感じる要因の一つとして、学校規模があるので、小規模校の教育活動の充実に向けた取組を進めてほしい。

Ｖ　第２分科会での検討における留意事項等
委員からの意見はなし。

部会長から、中南地区部会の委員構成について、追加の必要の有無等を確認したが、委員からの意見はなかった。

３　閉会